

モデル事業名	文化伝統等地域資源を活用した持続可能な地域の形成 -万葉の文化と風土に親しみ、ふるさとおこしに活かす紀伊万葉顕彰事業-
活動団体名	きいまんよう 紀伊万葉ネットワーク
ホームページ	http:// (活動団体のHPのアドレス) 無
所属/ 担当者名	事務局長 木村哲也
連絡先	電話番号:0736-22-2953 Eメールアドレス:akaneya-tetsu@kit.hi-ho.ne.jp
活動地域	わかやまけんいとくん かせだちく おおあざ 和歌山県伊都郡かつらぎ町笠田地区 (9大字)

● 活動地域の概要

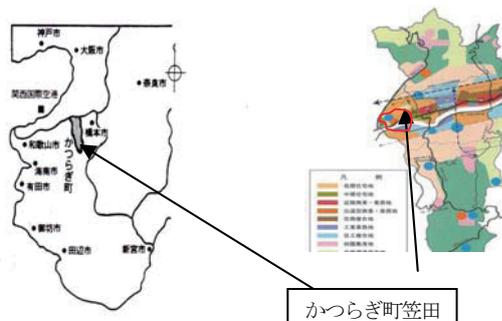
集落の数：9大字

集落毎の人口世帯数の現状推移：(96-07年)世帯数235戸が増え人口2,125人減 一人暮らし増

高齢化率：H21年3月末で32.1%に達しており、中には49.6%の大字もあり、最低大字でも28.6%に達している(かつらぎ町全体では30.7%)。

年齢別人口の現状推移：05年で年少人口28.6%生産人口59.5%年少人口11.9%いずれも年々減

就業割合 05年で第1次産業26%第2次22.4%第3次51.1%第2次産業やや減少傾向



公共交通 JR和歌山線 和歌山バス 町内コミュニティバス

● 活動地域の課題

対象地域では、若年層の都会志向と教育・就労環境等の要因による人口流出や地域の高齢化により、耕作放棄地が目立ちはじめ、後継者問題等、主な産業である農業への影響が懸念されているが、具体的な問題の把握には到っておらず、その実態把握と今後への対応策が大きな課題となっている。

他方、過去の総合調査の中で、地域内の個々の取り組みやその存在についての情報が共有されていない実態があり、個々の取組みを総合的に取りまとめ、発信する枠組みが必要であるとの指摘が出されて、その組織化が課題となっている。

● 活動の内容

(全体)

- 1.郷土の文化・風土への理解と農業への関心を深め、郷土への定住と支援につながることを目標とした啓発活動
- 2.地域の資源を活かし、定住できる生業を創生することを目標とした地域再生活動

(直近1年間の進捗など)

- ふるさと意識を育む啓発事業
 - ・高校生対象にモデル高校にて、現地踏査による啓発学習会の開催・実施(継続)
- 地域資源を活かした地域再生事業
 - ①地域資源を活かし、定住できる生業を創生するため、住民の検討組織(「笠田再生会議」)の組織化への取組
 - ②11月20日~21日第5回 紀伊万葉ウォーク「紀の川、妹背山・真土山めぐり」を企画実施
 - ・意図と経過：紀の川流域の歴史・文化資源を広域的につなぎ魅力アップした着地型観光の一環のモデル事業として企画推進する。(昨年12月、NPO法人ネットワーク紀伊が推進する着地型観光ビジネスネットワークに加盟参加)
 - ・8月10日 紀の川流域、南海道筋の団体・有志等で第5回紀伊万葉ウォーク実行委員会結成(笠田再生会議準備会は実行委員会に加盟参加、笠田地区担当実働母体となる)
 - ・9月10日 笠田再生会議結成
 - ・10月2日 先進地視察「富山県高岡万葉まつりに参加」(紀伊万葉ウォーク啓発を兼ね)

③4月17日、6月6日 大和から紀伊へ「万葉故地を訪ねて歩く旅」実施

④地域資源を活かした地域の再生に向けて：－紀伊万葉からの発信－着地型観光ガイドブック作成

⑤「耕作状況調査及び耕作放棄地に関する意向調査」については、全世帯対象に協働機関であるかつらぎ町が実施

● 活動の成果

・全体

(活動の成果、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- ・活動の柱である啓発活動については、地域への意識を喚起し、地域再生に向けての必要不可欠な基本的事項であり、その必要性と効果については、実施後のアンケートや感想文から、幅広い年齢層の人に笠田万葉の里の自然・文化・歴史を伝え、居住者には地域への誇りと再生の意欲を、他地域住民にも地域への関心を喚起出来ていると評価している。
- ・地域資源を活かした地域再生活動では、事業の実施により「新たな公」の必要性が地域の指導者(自治区長)等に周知され、地域の現状についての課題・危機意識を学習会を通じ共有する中で、行政との役割分担を確認しながら、各地区の運営にあたる区長、地域おこしの主催者、観光農園・農業法人、農協、地域有識者等、地域に誇りと愛着を持った数多くの人の参画を得て、本年9月に地域再生のための地区住民による「笠田再生会議」の設立に至っている。地域内ではその動きに関心が寄せられ、万葉植物の植栽・農園開放等、協力の輪が広がっている。
- ・また、四季折々の万葉歌に詠われた植物・木々を紹介する「万葉草木花集」と地域の歴史・文化と農業(農園・直販所等)を案内する「妹背山ふれあいハイキングコース」との組み合わせは、特色ある「万葉ウォーク」の試みとして、大きな関心と期待が内外から寄せられている。



紀伊万葉故地めぐり伊都・橋本実行委員会

・直近1年間の成果など

(活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

本年9月に発足させた「笠田再生会議」では、何気なく通り過ぎてしまい、特に集客機能を持たない笠田のまちに活気と関心を集めるため、「妹背山ふれあいハイキング」を地域再生イベントと位置付け、紀伊万葉故地めぐり伊都・橋本実行委員会に参画し、本年11月20日(土)21日(日)開催の第5回紀伊万葉ウォーク「紀の川、妹背山・真土山めぐり」の妹背山コースの具体の受け入れについて、企画・立案・実施を担当。実施にあたって、自治組織を通じて地区全世帯にパンフ配布、地元高校の吹奏楽の演奏による参加、町商工会笠田支会による万葉紀の川弁当の創作・販売、農園による直売所の開設、JR 笠田駅周辺での「笠田の市」同時開催等、協力の輪が広がっている。

さらに、今回のウォークは紀の川筋(南海道)沿いに市町村行政単位を越え広域的に取組が発展したことは各界の注目を集めている。



● 今後の課題及び展望

・課題(活動を通して発見された課題等を記入)

現下では、活動の全てが地域の人々の熱意とボランティアに頼らざるを得ない状況で、「ひと・もの」は地域に頼るとしても活動資金の調達に課題であり、今後は、地域ぐるみで取り組むことを明確にするため、活動資金を拠出負担する枠組みづくりの検討も肝要となっている。

また、活動の実施にあたっては、行政機関との役割分担と協働・協力関係の構築に向けた相互理解が不可欠である。

なお、紀伊万葉ウォーク企画・実施にあたって、トイレ問題等、受け入れ環境の整備が課題となった。

・展望(今後の取組みや検討について記入)

- ・「妹背山ふれあいハイキング」を地域イベントとして位置付け、四季の開催とその定例化に取り組むと同時に地域グループとの連携をさらに推進する。
- ・積み残して来た農業の実態調査について、その調査結果や昨年度の高校生・土曜講座アンケート結果等をふまえ、笠田再生会議において、地域の農業に関わる課題を把握・分析し、農地の有効策の検討を行い、具体の事業に向けた取組を推進する。

● その他(自由記述)